

1925年におけるカオダイ教サイバン・グループと カオダイ教外教公傳(Ngoại Giáo Công Truyền)

高 津 茂

キーワード：カオダイ教，外教公傳，瑤池宴会礼，望天求道，サイ・バン・グループ

はじめに

筆者は、これまでカオダイ教の教えが下された時からカオダイ教が教団としての成立⁽¹⁾をフランス植民地政庁から認可された時期の間の歴史や事跡に関していくつかの考察を著してきた⁽²⁾。また、1925年前後はカオダイ教の研究史においても多くの先人が注目してきた時期でもあり、研究テーマでもある⁽³⁾。

カオダイ教の源流は二つある。一つが内教心傳とも無為派ともいわれるもの⁽⁴⁾であり、もう一つは外教公傳とも普度派ともいわれる。この二つの源流の違いの一つは、神の意志をどのようにして受け取るかという方法の違いがある。すなわち、内教心傳は、中国の扶乩の流れを汲むと思われるフォ・ロアン(phò loan扶鸞(扶乩))の一種コオ・ブット(機筆)によるもので、カオダイ教ではゴック・コオ(玉機)を使用する形に洗練されている。一方、外教公傳は当初はフランスのスピリティズムの影響を受けたテーブル・ターニング、ヴェトナムではサイバン(xây bàn)という方法によった⁽⁵⁾。きわめて図式的に言えば、内教とはヴェトナム国内の宗教文化に根差した教えと解され、外教とはヴェトナム国外の宗教的な教え、具体的にはフランスのアラン・カルデックに代表される教え⁽⁶⁾に根差したものであると私は思う。内教心傳は、ひたすらに内面の修行を重視するのに対し、外教公傳は普ねく度するという人々の救済を使命とする。

この二つの源流が1926年以降のカオダイ教団の創設過程の中で、外教公傳により一時的に統合化されていった。教団として統一化した後に布教活動に専心したカオダイ教団は、フランス植民地支配下であえぐヴェトナム南部の民衆に、その宗教文化を通した主張は、爆発的といつて良いほどに受け入れられた。ヴェトナム共産党の成立が1930年であることを考えると、南部ヴェトナム民衆の意思表示の唯一の機関であったともいえる。この教団の正式名称は「大道三期普度」⁽⁷⁾であり、カオダイ教という名は通称に過ぎない。教団としてのカオダイ教の救済とは宗教的な意味での救済にとどまらず、政治的・社会的な意味をも含んだ救済を目的としているのではないか⁽⁸⁾と考えざるを得ないものと思う。直接的な植民地支配の中で、カオダイ教の教理構造が天の世界と現実世界との対概念の結果として生まれた⁽⁹⁾ため、普度という衆生の救済を重視した。その意図は大道三期普度という正式名称に集約されており、結果として逆に多くの支派の分離を招く一方、カオダイ教タイニン聖座派の性格を特徴づけているものと私は考えている。政治的には、解放前まで親仏・親日・親米路線をとったタイニン聖座派と親解放勢力に組した連交カオダイの各宗派に分かれているように見られる⁽¹⁰⁾ものの、宗教的には神意を伺う方法として扶鸞(扶乩)とサイ・バンという基本的な違いが創設当初にはあったものと思う。

本稿では、まづ最初にカオ・クウイン・クウ (Cao Quỳnh Cư), ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc), カオ・ホアイ・サン (Cao Hoài Sang) らの略歴に簡潔に触れ、次いで1925年にサイバンを通して彼らサイバン・グループが得た啓示⁽¹¹⁾について、極力資料に基づいて考察を加え、外教公傳の性格を明らかにしたい。

1. 史料について

近年、カオダイ教の資料のデジタル化が進む中で、最近になってタイニン聖座派の資料状況に大きな進捗がみられた。それは、同派の聖会が「道史委員会」を再建し、同聖会の検閲委員会に提出した後に、速やかにE-book等で刊行するように改善したことにある。その結果としてまず、ヌウ・ダウ・スウ フウオン・ヒェウ (Nữ Đầu Sư Hương Hiếu女性頭師)⁽¹²⁾が編纂し2012年にDAOCAODAI.INFOのウェブサイトに『ダオ・ス (ĐẠO SỬ道史)』が誕生した。本稿で利用するのはその第1巻の『ダオ・ス・サイ・バン (Đạo Sử Xây Bàn)⁽¹³⁾』である。この史料は聖会が検閲したものだけではあるが、サイ・バンにより降された神意や霊意を読めるという点で一次史料に準ずる二次資料であると思う。

もう一つ部分的に参照した資料は『ダオ・ス・ニュット・キ (ĐẠO SỬ NHẬT KÝ 道史日記)』⁽¹⁴⁾である。同資料は2017年に賢オグウエン・ヴァン・ホン (Nguyễn Văn Hồng) が道史委員会の史料の整理出版を耳にして、その草稿を準備しようと資料を探し集めて編纂したものである。

この『道史』を中心に『道史日記』を参照し、1925年の凡そ20サイバンの概要について検討することから、外教公傳の特色を明らかにすることが本稿の主題であるが、その量も膨大であり本稿の紙幅にも限りがあるので、史料の時期と内容によって表に整理した。

2. サイバン・グループの3人の略歴について

本稿でのサイバン・グループとはカオ・クウ

イン・クウ, ファム・コン・タック, カオ・ホアイ・サンの3氏⁽¹⁵⁾に着目して論ずる。3氏は共にフランス植民地政庁の書記であった。なお、サイバンとフォ・ロアンについては高津 茂 (2015) を参照されたい。

(1) カオ・クウイン・クウ1888-1929) 小史

カオ・クウイン・クウの字はボイ・ゴック (Bội Ngọc) と言い、1888年タイニン省ハム・ニン・トゥオン (Hàm Ninh Thượng) 總ヒエブ・ニン (Hiệp Ninh) 村に生まれた。氏の父親はカオ・クウイン・トゥアン (Cao Quỳnh Tuân1844-1896), 母親はチン・ティ・フエ (Trịnh Thị Huệ1853-1946) である。カオ・クウイン・クウは第4子であり、第3子の兄はカオ・クウイン・ズィウ (Cao Quỳnh Diêu) であった。ちなみに、このズィウの嫁であるラム・ティ・ネン (Lâm Thị Nền) とカオ・ホアイ・サンの娘カオ・ティ・ゴック・ラン (Cao Thị Ngọc Lang) の言葉によれば、カオ・クウインの家庭はカオ・ホアイ・サンの家庭と家系は異なるが一緒になってカオ家となった。また、バック・リュウ (Bac Liêu) のカオ・チュウ家 (カオ・チュウ・ファット (Cao Triều Phát) の家) と血統上の連携を持っていたので、嫁入りに当たってバック・リュウに下ってそこにあるカオ家の祠堂を拝まねばならなかった⁽¹⁶⁾。言うまでもなく、カオ・チュウ・ファットは後にタイニン聖座派とは袂を分かったカオダイ・ミン・チョン・ダオ聖会の指導者でありカオダイ愛国諸派による連攻を組織化し、ジュネーブ協定以降ハノイに移った人物である。

1907年クウはグウエン・ティ・フウオン (Nguyễn Thị Hương) と結婚し、2年後に長男カオ・クウイン・アン (Cao Quỳnh An) を得たが、アンはフランス留学中の1929年9月に亡くなった。1925年クウはベン・タン市場 (chợ Bến Thành) の前に位置したサイゴン鉄道局 (sở Hỏa Xa Sài Gòn) の書記となり、仏領時代の高級地方行政官である参佐の肩書となった。プル

デ通 (đường Bourdais) 134番地に家を借りて、母親や妻の母親に孝養を尽くした。

1925年になって、ハン・ズア舗 (phố Hàng Dừa) にあるカオ・ホアイ・サンの家で親しい友人が集まった時に、カオ・クウイン・クウはその場にいない亡霊と接触するためにサイバンをやってみないかという意見を出したところ、みんなが賛同した。

最初の真霊に接することができたのはクウの父親カオ・クウイン・トゥアンの霊であった。降霊を続けていく中で1925年の年末以降サイバンからダイ・ゴック・コオ (Đại ngọc cơ 大玉機) の扶けを借りるものに移り、またクウの近所の友人で心から進んで扶けてくれたファン・ティ (Phán Tý) にも頼った。カオ・クウイン・クウは瑤池宮七娘 (Thất Nương Diêu Trì Cung) と義兄弟の契りを交わしたことから、長兄 (Trưởng Ca) といわれた。それ以降、天の教えを開く事業は伸び広がった。

丙寅の年 (1926年) 3月15日クウはタ・コオ・ティエン・ハック・ダオ・シィ (Tá Cơ Tiên Hạc Đạo Sĩ 佐機仙鶴道士) という天色 (Thiên sắc) [天の職位] に寿ほがれた。

丙寅の年 (1926年) 8月15日になって、恩上 (Ơn Trên) はクウの家で瑤池宴会礼 (lễ Hội Yến Diêu Trì) を組織するよう恵を受けた。クウはファミ・コン・タックと一緒にフォ・ロアンを行い、クウは自分の家で多くの天の封じた職色 (chức sắc) を救済に導いた。

丙寅の年 (1926年) 10月15日、ゴオ・ケン (Gò Kén) で大道開明大礼 (Đại lễ Khai Minh Đại Đạo) が行われ、クウは上品 (Thượng Phẩm) に封じられ、この日から教えを行うことに全て専心するために妻のグウエン・ティ・フウオンと共に世事を捨ててタイニンに引っ越した。開明礼の後ニュ・ニャン和尚 (Hoà thượng Như Nhân 如眼和尚) は寺を要求した。恩上の導きに従って、多くの方が聖座 (Toà Thánh) の建設地を探していた時、クウは友人カオ・ヴァン・ディエン (Cao Văn Điện) に会い、フランス人

アスパ (Aspar) 氏の林地購入を紹介された。この未開拓の密林の開拓事業で、人夫頭はカオ上品まで計算に入れざるを得なかったため、クウは苦勞して林間で食事しなければならなくなった。あらゆる場所に夫役に駆り出された者を割り当てねばならなかったり、フランス人省長に対応せねばならなくなった。その1926年10月の状況をフウオン・ヒェウは次のように述べている。

「当時フランス政府は疑いを持っていて、教えに強制したり、集会のために集まって群れないよう強いたり、上品はフランス人に細かいことまで詰問されたが、正殿がないのでお供えもできなかった。」⁽¹⁷⁾

このような辛苦の末に、開拓が終わった時にはカオ上品は若干の人に追い払われ大変な悲しさの中で病に倒れ、タオ・サァ・ヒィエン・クン (Thảo Xá Hiên Cung 草舎賢宮) で休養した。

戊辰の年 (1928年) 10月15日、至尊の命により聖会は上品に対し、儀礼を設けて歓迎し、戊辰の年 (1928年) 12月26日に聖座に戻して浄室 (tịnh thất) に入れた。

己巳の年 (1929年) 3月1日、辛い精神病により身体を消耗し、昼の11時上品は草舎賢宮にあって天に登った。

己巳の年 (1929年) 3月7日、恩上の命によりタイ・トオ・タン (Thái Thơ Thanh) はタイニン聖座の前にカオ上品のための宝塔を建てた。カオ・クイン・クウは大変多くの私財をカオダイ教に寄付しており、タイニン聖座の広域な土地もその一つである⁽¹⁸⁾。

(2) ファム・コン・タック (1890-1959) 小史⁽¹⁹⁾

ファミ・コン・タック、字はアイ・ザン (Ái Dân 愛民)、雅号はタイ・ソン・ダオ (Tây Sơn Đạo 西山道) といい、庚寅の年の5月5日端午の節句の日 (1890年6月21日) にタン・アン (Tân An) 省ビン・ラップ (Bình Lập) 村で生まれた。タックは、父タイニン省チャン・バン (Trảng Bàng) 郡アン・ホア (An Hoà) 村の人であるファ

ム・コン・ティエン (Phạm Công Thiên) と母ラ・ティ・ドゥオン (La Thị Đường) の第8子であった。1890年ファミン・コン・ティエンはタン・アンで公務についていた。当時ファミン家の家庭はカトリックの教えに従っていた。

タックは6歳から学校に通い始め、15歳になった1905年にはシャスル・ロー (Chasseloup-Laubat) 校 [現在はレ・クイ・ドン (Lê Quý Đôn) 校] に入り、1907年に卒業試験に合格した。在学中にタックは [ルオン・カック・ニン (Lương Khắc Ninh) やギルバート・チャン・チャン・チュウ (Gilbert Trần Chánh Chiếu) …各氏の] ミン・タン・コン・ゲエ・サア (Minh Tân Công Nghệ Xã 明新工芸社) 運動に参加し、第4番目の船で日本に留学 (Đông Du) する予定になっていたが、実現しなかった。しばらくの間タックはタイニンのアン・ホア村に難を避けていたが、タックは闘争方法を変え、『コン・ルアン (Công Luận 公論)』、『ラ・クロシュ・フェレ (La Cloche Felee)』、『ルク・ティン・タン・ヴァン (Lục Tỉnh Tân Văn 六省新文)』、『ノン・コオ・ミン・ダン (Nông Cổ Mìn Đàm)』…のような各新聞に文章を書いて言論の場を利用して、国の独立を待つという理想に献身するという方法であった。『ルク・ティン・タン・ヴァン』紙上の、1907年12月12日の「上が不正を行えば、下は乱れる (Thượng bất chánh hạ tắc loạn)」や1908年1月23日の「民族の団結と時事評論 (Dân tộc đoàn kết và thời đàm)」のような文章が典型例である。

暮らし向きが困窮してきたため、庚戌の年 (1910) 20歳になったタックはサイゴン商政局 (Sở Thương Chánh Sài Gòn ; Bureau des Douanes et Regies) の書記となった。翌1911年、21歳になったタックはグウエン・ティ・ニユウ (Nguyễn Thị Nhiều 1892-1968) と結婚した。二人の間には沢山の子供ができたが、皆早死にし、第3子のファミン・ホオ・カム (Phạm Hồ Cầm 1914-1998) と第4子のファミン・タン・チャン (Phạm Tấn Tranh 1915-1990) の娘二人だけが

残った。

1925年カオダイは外教公傳が主張する救済重視に変化し、丙寅の年3月15日 (1926年4月26日) にファミン・コン・タックは天の封じたホ・ファップ (Hộ Pháp 護法) に寿がれ、天の詔勅はホオ・ザ・ティエン・ドン・タ・コオ・ダオ・スイ (Hộ Giá Tiên Đồng Tá Cơ Đạo Sĩ 護駕仙童佐機道士) というものであった。教えの機を開き救済する過程の中で重要な各行事には皆タックが同席していた。当初のサイバンと1925年6月に引き続き事柄は次のようである。

- 乙丑の年 (1925) 8月15日 ; レ・ホイ・イエーン・ズィエウ・チ (Lễ Hội Yên Diều Trì 瑤池宴会礼)
- 乙丑の年11月1日 ; レ・ヴォン・ティエン・カウ・ダオ (Lễ Vọng Thiên Cầu Đạo 望天求道礼)
- 1925年クリスマス ; カオダイ仙翁の紅名を受け継ぐ
- 除夜の壇 (Đàn giao thừa)
- 丙寅の年の天の誕生日辰礼 (lễ Vía Trời)⁽²⁰⁾
- 2つの支派が集まって和やかに楽しむ第1回天の封じた職色礼 (Lễ Thiên Phong Chức Sắc)
- 丙寅の年8月23日 ; 教えの開籍 (Khai tịch Đạo) での集合時期
- 大道開明大礼

これらの全ての行事の中でタックはしっかりと役割を果たし、組織を調整し、恩上の儀式にフォ・ロアンを継ぎ足した。

1927年、護法は公務でカンボジアに移り、この機会にタックは天の教えを当地に広く普及させた。この時期タックは、カオ・ホアイ・サン (Tiếp Đạo 接道) の長男で後にティエプ・ダオ (Tiếp Đạo 接道) の職位に就いたカオ・ドック・チョン (Cao Đức Trọng) の家に仮住まいしていた。

1934年11月19日、教宗レ・ヴァン・チュン (Giáo Tông Lê Văn Trung) が登仙した。そのため内部の宗務や外部の世俗の政事に多くの混乱が生じた。1934年12月12日、タイニンの聖会 (Hội

Thánh) と人生会 (Hội Nhơn Sinh) は、ヒェップ・ティエン (Hiệp Thiên 協天) とクウ・チュン (Cửu Trùng 九重) の二つの有形台掌管の権 (Quyền Chương Quản Nhị Hữu Hình Đài) を掌握することを護法に要求した。この情勢の中でタックは責任を引き受け臨機応変の措置を取って、風波の中で教えの船を切り盛りせざるを得なかった。

1936年、それ以上ためらうことができず護法は積極的に動員して、1929年のクウの死後滞っていたタイニン聖座 (Toà Thánh Tây Ninh) 建設を促進した。聖座は恩上の導きと加護によって作り上げられた。

教えの基はすでに傾いており、1941年タックはフランスによって拘留され、1941年7月27日コンピエーニュ (Compiègne) 号の船でアフリカのマダガスカル島に流された。1946年に帰国して初めてタイニン聖座の建設に接した。[聖座は1947年から開門を始め、1955年に至って初めて落成した。]

丙申の年 (1956)、一度立ち戻って考え護法は1月5日に亡命して僅かの職色と共にカンボジアのプノンペンに移った。このことについて護法は「私は教えの個人的自由に固執するために自らに出国を強いるを得ないし、この事が平和裡に共存する方法であり種族と版図を統一することのできる新しい解決法である。」と宣言している。

己亥の年4月10日 (1959年5月17日)、ファム・コン・タックは歳70歳にして天に帰した。蓮台はカンボジアのプノンペンに置かれていた。

(3) カオ・ホアイ・サン (1901-1971) 小史

カオ・ホアイ・サンの字はタン・トゥーイ (Thanh Thủy 清水) であり、道号はフエ・ギエム (Huệ Nghiêm 惠嚴) あるいはフエ・ザック (Huệ Giác 惠覚) と称した。辛丑の年7月29日 (1901年9月11日) にタイニン省タイ・ビン (Thái Bình) 社で生まれた。サンの父親であるカオ・ホアイ・アン (Cao Hoài Ân 1878-

1909) はヴェトナム最初の裁判官の一人であった。[アンの真霊は、サイバンの時に儀式に降り何度か接触した。] サンの母親はホォ・ティールゥ (Hò Thị Lữ 1878-1972)⁽²¹⁾であった。カオ・ホアイ・サンは父アンと母ルゥの末子であり、姉は後にタイニン聖座の孤児院の監督となったカオ・ティ・クウオン (Cao Thị Cường 1898-1973) であり、長兄は後に協天台接道となったカオ・ドゥック・チョン (Cao Đức Trọng 1897-1958) であった。

学校に行く時期になり、サンはフウ・ニャン (Phú Nhuận) にあったカオ・クウイン・クウの兄であるカオ・クウイン・ズィエウの家に良く立ち寄っていた。その縁で、サンはクウと義兄弟の契りを結んだ。シャッスル・ローバ校に学び、卒業試験に合格した。

1920年にサンは商政局の書記となり、それによりタックと親しくなり、タイ・ビン市場 (chợ Thái Bình) に近い [現在のコン・クウイン (Cổng Quỳnh) 通り。] アラス通り (đường Arras) のハン・ユア (Hàng Dừa) 区部の共同住宅を一緒に借りた。

1921年、20歳になったサンは、カイ・レイ (Cai Lây) 出身のヴォ・ティ・ザオ (Võ Thị Giáo 1902-1948) と結婚し、9子を設けたが、9人の子供のうち6人は生まれた年に死んでいる。

1925年7月25日、ここで最初のサイバンが行われた。

丙寅の年3月15日 (1926年4月26日)、タイニン聖座の協天台のトゥオン・サン (Thượng Sanh 上生) に封じられた。その前にサンは大変若いけれどもしっかりした道心を持っていることから、サンと配偶者のヴォ・ティ・ザオは、ガリエニ (Gallieni) 通りのグウエン・ヴァン・トゥオン (Nguyễn Văn Tường) 氏の家で行われたカイ・ティック・ダオ (開籍道) の集会と一緒に出席した。

1930年になってブルデ (Bourdais) 通り121番地に家を借り、1941年になって、サンはマルシェ (Marchaise) 通り142番地に居住した。こ

1925年におけるカオダイ教サイバン・グループとカオダイ教外教公傳 (Ngoại Giáo Công Truyền)

表 フウオン・ヒェウ『道史』第1巻「サイバンによる道史」 1925年

	西暦 (1925-1926)	陰暦 (乙丑の年)	サイバンの概要	『道史日記』 との異同
1	8月22日	7月5日	八娘が「情郎への饞別」という問題の詩を降す Bát Nương giảng làm thi vấn đề "Tiễn biệt tình lang"	同
2	8月31日	7月13日	ニャン・アム・ダオ・チュオン (間陰道長) の詩 Nhân Âm Đạo Trưởng thi	同
3	9月1日	7月14日	瑤池宴会を重ねる Tích Hội Yến Diêu Trì	同
4	9月8日	8月22日	六娘と七娘の詩 Lục Nương & Thất Nương thi	同
5	10月18日	9月1日	至尊がA.Ă.Ăという仮名の解説をした：「先人が染まった雪を哀れんだと考え、後の一団の人々は霧のかかったようなはつきりしない心境を物悲しく辛いものと感じた」 Đức Chí Tôn tá danh A.Ă.Ă giải nghĩa : "Người trước nghĩ thương con tuyết nhuộm, Lũ sau buồn chạnh nỗi sương pha"	同
6	10月20日	9月3日	A.Ă.Ă氏の玄妙さ、当に神聖なるものが三氏がA.Ă.Ăを深く愛しているとみなしているかを試した Huyền diệu của ông A.Ă.Ă, cũng là Thiêng Liêng thử ba ông coi có thương ông A.Ă.Ă không	異
7	10月20日 夜中の12時	9月3日	九天玄女が教えを論した Cửu Thiên Huyền Nữ dạy đạo	異
8	(1925年)	(乙丑の年)	A.Ă.Ăの名を借りた至尊が、(保法公) グウエン・チュン・ハウ氏と (接世公) レエ・テエ・ヴィン氏の心を捉える Đức Chí Tôn tá danh A.Ă.Ă thu phục ông Nguyễn Trung Hậu (Ngài Bảo Pháp) & ông Lê Thế Vinh (Ngài Tiếp Thế)	異
9	11月13日	9月27日	クイ・カオや八娘が詩を降し、A.Ă.Ăが「儒教の書を納める箱を積む珠の車」を解説 Quý Cao xướng thi & Bát Nương thi & A.Ă.Ă giải nghĩa : " Niếp Từ Xe Châu"	異
10	11月14日	9月28日	ニャン・アム・ダオ・チュオン (間陰道長) の詩 Nhân Âm Đạo Trưởng thi	異
11	11月24日	10月9日	七娘の『道徳に照らして爵位申請書を奉ずる』の解説と七娘の『いい加減にごまかして日を過ごすことを経てきた』の解説、それに六娘の詩とA.Ă.Ăの詩 Thất Nương giải nghĩa : "Phụng hàm đơn chiếu đệ dương bạn" & Thất Nương giải nghĩa : "Trái bao thô lặn ác tà" & Lục Nương thi & A.Ă.Ă thi	異
12	11月27日	10月12日	貴高と七娘の詩文 Quý Cao, Thất Nương thi văn	同
13	12月15日	10月30日	トゥアン・ドックの詩の原文にクイ・カオが和す Quý Cao hòa nguyên văn bài thi của Thuần Đức	異
14	12月15日	10月30日	ボン・ズイン (蓬盈) が詩を降し、六娘が和す Bồng Dinh xướng thi & Lục Nương họa	同
15	12月16日	11月1日	天を望んで教えを求める Vọng Thiên Cầu Đạo	異
16	12月6～ 23日	10月・ 11月	A.Ă.Ăと各神霊の名を借りた至尊の教えを論す詩文 : Thi văn dạy Đạo của Đức Chí Tôn tá danh A.Ă.Ă và các Đấng	異
17	12月19日	11月4日	宗金妙武仙翁総統山神の詩 Thần Sơn Quan Tổng Thống Tông Kim Diệu Võ Tiên Ông thi	異
18	12月25日	11月10日	A.Ă.Ăと各神霊の名を借りた至尊の教えを論す詩文 : Thi văn dạy Đạo của Đức Chí Tôn tá danh A.Ă.Ă và các Đấng	同
19	12月31日	11月16日	アアアの名を借りて至尊が師の名を称す、と聖人ピエールの詩 Đức Chí Tôn tá danh A.Ă.Ă xưng danh THẦY & Thánh St Pierre thi	同
20	1926年 1月1～ 7日	11月	至尊が教えを授けることを始める Đức Chí Tôn khởi sự dạy Đạo	同
21	1949年 10月6日	(己丑の年) 8月15日	護法の説く道：瑤池金母宴会礼 Thuyết Đạo của Đức Hộ Pháp : Lễ Hội Yến Diêu Trì Kim Mẫu.	異

の時期、カオダイは救済重視に変化し、教えの基は様々な浮沈みを経験した。

1956年に護法がカンボジアに亡命せざるを得なくなったため、1957年5月14日、聖会の要求により上生であったサンはタイニン聖座のチュオン・クワン (Chưởng Quân 掌管) の権を握った。サンは以前には未だできていなかった聖座の正門や各付属門の建設をすっかり完成させ、さらにコ・クワン・ファット・タン・フォ・トン・ザオ・リ (Cơ Quan Phát Thanh Phổ Thông Giáo Lý 教理普通送信機関)⁽²²⁾やバン・テ・ダオ (Ban Thế Đạo 世道委員会)⁽²³⁾事務室、バック・トン・ダオ (Bắc Tông Đạo 北宗道)、ドゥオン・ニョン (Đường Nhơn 唐人)⁽²⁴⁾、タン・ニョン (Tân Nhơn 秦人)⁽²⁵⁾、ダウ・ス・ドゥオン (Đầu Sư Đường 頭師堂)⁽²⁶⁾…などを建設した。

サンは16弦琴や琵琶を大変よく操る才能に優れた音楽教師の一人であった。サンは至尊の天意に従って楽部を整備し、教理普通送信機関の楽士を訓練し、民族の古い伝統的音楽の根本に則った教えの音楽をすっかり改良した。

1971年4月初めサンは療養のためにサイゴンに戻り、第1区コ・バック (Cô Bắc) 通り23番地の26にあった自分の家で、辛亥の年3月26日 (1971年4月21日) 17時に天に登った。上生の蓮台は、タイニン聖座に置かれている。

以上3氏の略歴を見ると、ファム・コン・タックの生まれはタン・アンであるものの、3氏ともにタイニン省の同郷とあって良く、タックとサンはシャッスル・ローバーの同窓でもある。あえて言えばゴ・ヴァン・チュウもカオ・チュウ・ファットも同窓であり、先輩である。カオダイ教にあって、タックは護法⁽²⁷⁾となり、クウは上品⁽²⁸⁾としてタイニン聖座の礎建設に尽力し、サンは上生として、タックの死後はタックに代わってカオダイ教タイニン聖座派の指導的地位を継承した。さらなる特徴はドン・ズー運動にも関わっていたと思われるタックの突出した政治性と言える。後にカオダイ教を国教にし

ようと説いた⁽²⁹⁾萌芽を観るように思う。奇しくもファム・コン・タックは、ホー・チ・ミンと同じ1890年生まれである。

年齢から言えば、クウが41歳の若さで1929年カオダイ教の教団成立許可を得てからわずか3年で亡くなっている。

3. サイバン小史の概要の考察

女性頭師フウオン・ヒエウの『道史』第1巻に記載されている1925年に行われたサイバンの資料は19回分の記載がある。この19回分のサイバンの資料を時系列に沿って整理したものが表である。このサイバンの資料は、ヴェトナム語で記された七言律詩や七言絶句の詩という形をとって神霊が降す形式が多いが、サイバンに参加した者の問いと降った霊の応えという対話体による表記も見られ、アラン・カルデックの『霊の書』と同様の形式⁽³⁰⁾を想起させる。

一方ヒエン・タイ (賢才) グウエン・ヴァン・ホンの『道史日記』第1巻第1分冊の1925年の時期に当たる資料は41に上るが、この1925年の『道史』と『道史日記』に部分的にでも共通する資料が記されている資料は10を数えるのみである。本稿ではフウオン・ヒエウの『道史』を中心に考察し、適宜『道史日記』を参照するものとする。

『道史』巻一の1925年に当たる19のすべてにわたって解題・分析すべきだが、紙幅の関係で、『道史』巻一の1925年19の資料に共通するテーマに分けて、適宜解題を付して分析することとする。なお、『道史日記』巻1第1分冊の1925年の資料の最初の11のサイバンに関する資料については、『道史』に「サイバン小史」⁽³¹⁾が記されており、筆者もすでに一部を紹介している⁽³²⁾ので本稿では省くこととする。

『道史』巻一の1925年 (乙丑の年) 6月から12月までの7か月間の重要事項は次の5つとのグウエン・ヴァン・ホンの指摘⁽³³⁾を参照しつつ、表の内容から以下のに纏められる。(数字は、表中の資料番号を示す。)

- (1) クウ・ティエン・フウエン・ヌウ (Cử Thiên Huyền Nữ 九天玄女), ルック・ヌウオン (Lục Nương 六娘), タット・ヌウオン (Thất Nương 七娘), バット・ヌウオン (Bát Nương 八娘)⁽³⁴⁾ ; 1・4・7・(9)・11・12・14
 (2) 間陰道長 ; 2・10
 (3) 瑤池宮宴会 ; 3・21
 (4) A ĀĀの降臨 ; 5・6・8・9・13・16・18・19
 (5) 望天求道 ; 15

以下、この順に考察を進める。

(1) 九天玄女 (六娘・七娘・八娘)

- ① 1925年8月22日 (乙丑の年7月5日) のサイバンで、「八娘が「情郎への餞別」という問題の詩を降した。」と題する資料が記されている。その初めに、「明後日、カオ・ホアイ・サンが「情郎への餞別」と出題するであろうが、氏の出題意図はあくまでも試しに出したものである。」とあり、それに続いて、「乙丑の年7月5日 (1925年8月22日 (土) 八娘が「情郎への餞別」という問題の詩 (ヴェトナム語による七言律詩) を降した。

数日を隔てたのち、クイ・カオ (Quí Cao) が八娘の詩の原韻に和した詩を降した。(乙丑の年7月8日 (1925年8月25日) と記され、七言律詩が掲載されているのみである。

ドォアン・ゴック・クウエ嬢は七娘に擬される人物であり、上述の「情郎への餞別」という詩はホン・リイエン・バック嬢の詩⁽³⁵⁾とされている。このことは『道史』でいう八娘はホン・リイエン・バック嬢に擬されるとも思われる。併せて、クイ・カオとは当時有名な詩人の一人であったフウイン・ティエン・キェウ (Huỳnh Thiên Kiều) の号であり、彼は巡撫の役所で仕事をしてしたが、サイゴン市役所に補任され営業管理に関して遇された人物である。

- ② 1925年9月 (乙丑の年8月) のサイバンで、「六娘と七娘の詩」と題する資料が記されて

いる。その初めに、「六娘が二句の詩を創り、3氏が続くために六句を譲った。」とある。詩の内容よりも、六娘と七娘がサイ・バンに降って3氏と一緒にあって詩を創ったということに意味があるように思われる。

- ③ 1925年10月20日 (乙丑の年9月3日) 夜12時のサイバンで、「九天玄女が教えを論した」と題する資料が記されている。

その内容は「九天玄女が丁寧に三位のダオ・フウ (道友) を招き入れ、将来に備えるために心を養い修行をせねばならない。」とある。ここでいう「九天玄女」は古代中国神話の中で、黄帝の兵法の師匠とされ、瑤池金母⁽³⁶⁾である西王母が蚩尤と戦う黄帝のために自らの周囲に侍する9位の仙女を遣わしたとされる高位の仙女のこと⁽³⁷⁾である。

- ④ 1925年11月24日 (乙丑の年10月9日) のサイバンで「七娘の『道德に照らして爵位申請書を奉ずる』の解説と七娘の『いい加減にごまかして日を過ごすことを経てきた』の解説、それに六娘の詩とA ĀĀの詩」と題する記述が下されている。すなわち、七娘の「Đương banとは、陽のあたる岸のことであり、道德のことである。」との解説や、六娘とA ĀĀの七言絶句が記されている。

- ⑤ 1925年11月27日 (乙丑の年10月12日) のサイバンで「クイ・カオと七娘の詩文」と題する記述が下されている。クイ・カオの詩の後の2行についての解説を七娘が記している。

- ⑥ 1925年12月15日 (乙丑の年10月30日) のサイバンで「ボン・ズイン (Bông Dinh)⁽³⁸⁾が詩を降し、六娘が和す」と題する七言律詩が下されている。

(2) ニャン・アム・ダオ・チュオン (Đức Nhân Âm Đạo Trưởng 間陰道長)

- ① 1925年8月31日 (乙丑の年7月14日) のサイバンに「ニャン・アム・ダオ・チュオン (間陰道長) の詩」と題する七言絶句が記されている。

「多くの月日によって、降伏することが
ほぼ習慣になっているようでもある。
目を持ち上げて窺うに、人の守るべき道を
揺るがせにしているように見える。
瓢一杯の菊酒は、不義を招き、
ヴェトナムの山河は、あらゆる時期が春宵
にあるようである。」

この詩の後にカオ・スアン・ロック (Cao Xuân Lộc) がこの上述の詩に和して詩を掲げ、その翌日1925年9月1日(乙丑の年)7月15日)に、カオ・クウイン・クウが上述の2つの詩に和した七言絶句を掲げている。

- ② 1925年11月14日(乙丑の年9月28日)のサイバンに「間陰道長の詩」と題し、七言律詩の10連環詩が記載されている。この詩の全文を訳出する紙幅はないが、第2番目の七言律詩がドン・ズウ運動 (phong trào Đông Du) との係りにも触れており、政治的な意図をうかがわせるので、この部分だけを以下に抄訳する。

「2 山河(国家)は至る所長閑なものだが、
[ヴェトナム]南(男)は悉く狂風(戦闘)が
過ぎて打ち倒されたように見える。
湧き出す人々は、土民が武器を高く掲げん
ことを図っている。
[ヴェトナムの]山河に接し、頑張り通すも
のと期待している。
偽りの常に不安定な官僚生活を口にせず
に隠している、若者たちを哀れむ。
船で [東に] 遊ぶことに遅れ、揺さぶられ、
経験を積んだ自分がなす務めを恥じている。
同時に、輝かしい人の世を建設したいと欲
むなら、

この厳しい世の中で一步踏み出してみよ。」
とある。ここでいう「船で東に遊ぶ」とは
ドンズー運動で東京に留学することを意味し、
それに遅れたとはファム・コン・タックが4
番目の船に乗る予定であったのに乗れなかつ
た経緯を指していると思われる。

この詩の背景としては、『道史日記』の
1925年11月10日(乙丑の年9月24日)夜に「佐
官レエ・ヴァン・ズェット (Tả Quân Lê Văn
Duyêt)⁽³⁹⁾がヴェトナムの時局に関する詩を
壇に降した」と題する記述がある。これは『道
史日記』にしか記述がないもので、心霊の降
す詩の多くが文学的な記述内容が多い中で、
政治的な傾向を有する数少ない事例である。

冒頭に「時局を尋ねるために幾多の志士が
壇に仕え、三氏のサイバンに仕えるよう招請
を受けた。そこで、佐官レエ・ヴァン・ズェッ
トが、ご希望通りにお応えするために降った。

この夜クウ・タック・サンの三氏は残念に
思うとともに佐官が卓に入って詩を降した時
に最も深く感動した。」とあり、七言律詩が
以下のように続く。すなわち、

「度々の戦争に、気持ちが高ぶっている。
植民地で、稼業を譲った誰を責めよとい
うのか、一般の大衆は先祖伝来の役人に不平
をタラタラ言うしかなく、
北・中・南圻の人々は、邪な西洋の法規へ
の怒りで胸がいっぱいになっている。
詩から離れても、王室は損なわれている。
ヴェトナム人は今こそ攻撃し、輝かしい国
家に返る事業に仕えん。
国難にあつて、近しい民は十分にそのつも
りである。
圧政には、平和な時がくるまで死力を尽く
すであろう。」

と記している。また、数日を隔てて、ズェッ
トは卓に入り込み、最初の詩に引き続いて第
2の七言律詩を記している。紙幅の関係でこ
れを略すが、この詩を読んで、サンは「現在
の情勢の中で、各勤皇グループは互に結集し、
奴隷の軛から脱するために革命に立ち上がる
だろうか?」との疑問を呈しており、それ
に対してズェットは再び七言絶句で応えてい
る。すなわち、

「強弱二つの方法があることは明らかである、

国家が安らかになるには、更に2・30年かかるであろう。

気持ちを抑えて、じっと堪えて情勢を見るべきで、

急いで黒いものを倒すようなことを引き起こすな！」

とある。この時局認識は、勤王グループが3氏のサイ・バンによる神霊の認識を求めた中で軍事的な英雄であるレ・ヴァン・ズェットの見解を求めた形をとっているが、その見解は、国を思いながらも武装蜂起の時期でなく、軽挙妄動することなく自重することを求めている。ちなみに、この時期ファン・チュウ・チンの時局に関する演説などがあり、カオ・チュウ・ファットは、3氏のサイ・バンにも関心を持ちながらもファン・チュウ・チンの改良主義に傾倒していた⁽⁴⁰⁾ように思われる。

(3) 瑤池宮宴会礼⁽⁴¹⁾

- ① 1925年9月1日(乙丑の年8月15日)のサイ・バンで「瑤池宴会を積み重ねる。」と題し、次の記述がある。

「ドォアン・ゴック・クエ (Đoàn Ngọc Qué) が三氏に論じた。三兄が詩を求めたところ、その日三兄は菜食せねばならないとの初めての句を得た。(三氏はドォアン嬢のその日の求めに従って菜食した。)

1925年9月1日(乙丑の年8月15日)、三氏はドォアン嬢に詩を懇求して卓に臨んだ。」詩は六娘の名で降され七言律詩である。

食事の後少しして、三氏は六娘の詩の第5句と第6句の解説をA ĀĀ に求め、A ĀĀ が応えて、金馬とは太陽のことであり太陽の光の明るい場所で、玉兔とは月のことであり、

この選ばれた2つの句の詩文は太陽と月を指している。と解説している。

- ② [以下は、1925年のサイ・バンに降された瑤池宮宴会礼に関する1949年の護法ファム・コン・タックによる解説であり、抄訳する。]

1949年10月6日(己丑の年8月15日)の護法の説く道；瑤池金母宴会礼との題の下「仏母の聖なる命令に従った乙丑の年10月27日の『望天求道』により、己丑の年(1949)8月15日聖殿での護法の説く道からの抜粋」が『道史』巻一には「瑤池宴会の積み重ね」に次いで記されて、サイ・バンによる道史の解説と意味付けがなされている。その冒頭で「本日は、瑤池宴会の秘法を至尊が真の教えの中に打ち立てられた秘法の記念日であり、至尊のすべての子供達がこの神秘の秘密を広く理解するために説明したい。」と説いている。その上で無形の世界の神霊、10人の神霊すなわち仏母と九位の天娘をもてなすために宴会を設けるよう至尊は諭され、有形の世界では上生・上品・護法の3人がおり⁽⁴²⁾、この宴会は女性正配師フウォン・ヒエウが至尊の命に従って設けたもので、仏母の祭壇とその下に座るように九脚の椅子が置かれた。この瑤池宴会の形式や意義について触れた後、瑤池宴会礼の解説すなわち秘法の解説を行なっている。「至尊の全聖体は、至尊の子供達の多くの意思のために努力することにある。すなわち、規則に反駁した者がゴック・フ・クン (Ngọc Hư Cung 玉虚宮) に配された時から、極楽世界の門戸を閉ざされた衆生は乾坤宇宙の全てが修行でありそれを成就することは極めて稀であり、その方法も非常に困難であり達成したくとも容易ではない。古法の定めによれば、瑤池宮に帰した真魂はホイ・イエーン・バン・ダオ (Hội Yến Bàn Đào 蟠桃宴会) に受け入れられる。即ち瑤池宴会に受け入れられ、ダオ・ティエン (Đào Tiên 桃仙) の果実を食べ仙酒を飲むことができ初めて無の境地に居るティエン・リエーン・ハン・ソン (Thiên

Liêng Hằng Sóng 恒生神聖)の方々に入ることができるのである。言うなれば入籍である。ごく僅かな部分でも受け入れられるということであれば、誰もが行って見た時から今日まで受け入れられてきたこととなる。今の今まで至尊は、至尊の子供達を救済し尽くすと決めているが、この秘法でもって救済するのである。それゆえ、至尊の神聖にして溢れ出る恩恵を享受できるのは、仏母の金盤の地においてなのである。この教えの門戸における瑤池宴会の秘法によって至尊の子供達が解脱するために、至尊は仏母に迫って、この世間まで至らねばならないとしているのである。これこそが至尊の手で定められたこの方法によってのみ可能で神聖な秘法である。今日は、秘法をもって衆生を解脱させ衆生すべての万霊を救済し尽くす仏母の日に当たる。この末世において、至尊はこの教えの門戸の中でのみ、秘法のままにしているのである。」とある。要は、1949年の理解は、どのような罪業を重ねた者でも瑤池宴会に受け入れられさえすれば、桃仙の実を食べ仙酒を飲んで恒生神聖な神霊に加えられ救済されるという。瑤池金母こと西王母が現世の人間の生命を救い長寿を与えるだけでなく、霊の世界においても解脱と救済をするよう玉皇上帝が按排しており、この秘法は至尊がカオダイの教えの門戸においてのみ黙認しているとしている。

カオダイ教は「万教合一」を謳い、儒教・仏教・道教・キリスト教・精霊崇拜を含むユニバーサルな宗教を標榜しているが、1925年からの開初期と少なくとも1949年までにおいては、中国的古代神話世界の信仰に染まったローカルな地母神信仰であるタイン・マウ(聖母)信仰を、瑤池宮宴会礼の導入により取り込むことに腐心していたと思われる。

(4) A Ầ氏（A Ầ）の降臨

① 1925年10月18日(乙丑の年9月1日)のサイバンで「至尊がA Ầ（A Ầ）という仮名の解説を

した。「先人が染まった雪を哀れんだと考え、後の一団の人々は霧のかかったようなはっきりしない心境を物悲しく辛いものと感じた」と題し、次の記述がある。

トオ・ディア・タイ・タン(Thỏ Địa Tài Thần土地財神)が卓を叩いて詩を降した。土地財神の2つの句を抜き出し、A Ầ（A Ầ）に解説を求めた。まず2つの句とは「先人が染まった雪を哀れんだと考え」と「後の一団の人々は霧のかかったようなはっきりしない心境を物悲しく辛いものと感じた」との2つの句である。

② 1925年10月20日(乙丑の年9月3日)のサイバンで「A Ầ（A Ầ）氏の玄妙さ、当に神聖なるものが三氏がA Ầ（A Ầ）を深く愛しているかを試した」と題し、次の記述がある。「およそ乙丑の年9月、A Ầ（A Ầ）氏が三氏に次のような問いを降した。私がティエン・コ(Thiên cơ天機)を明かして言うなら、[神仙の居る場所である]玉虚において罪を着せたことがあります。どうぞ三位の道友は、玉虚での句について私の過誤を赦して欲しい。もし間に合わせの句と気がかりでないなら、私は罰せられるであろう。護法、上品、上生⁽⁴³⁾は不安になった。三氏の下（下）の香を立てる卓に瑤池宮の句が伝わってきた。カオ上品が一首を作り香を立てる卓の前で詩を吟じた。」

1925年10月20日の時点では、クウ、タック、サン（クウ、タック、サン）の3氏とも護法・上品・上生には任じられていない。この資料が原資料ではないことを意味している。A Ầ（A Ầ）が弱みを見せて三氏を試したにもかかわらず、師への信頼を崩さずA Ầ（A Ầ）のテストに合格して、選ばれた存在であることを示す意図があったのか、意図は定かではない。

③ 1925年(乙丑の年)のサイバンで「A Ầ（A Ầ）の名を借りた至尊が、(保法公)グウエン・チュエン・ハウ⁽⁴⁴⁾氏と(接世公)レエ・テエ・ヴィン氏の心を捉える」と題し、次の文が記されている。

「1925年、グウエン・チュン・ハウ氏がタック、クウ、サンのサイバンにとても面白い詩が下っているとのうわさを耳にして、実際に見たく思っカオ・クイン・クウ氏の家を訪れた。グウエン・チュン・ハウ氏が壇に仕え、A ĀĀが降って卓を叩き、次の絶句を降した。

詩

文の性質は純（トゥアン）で才能と徳（ドゥック）は高く、

村の名声を詩がさらに加える。

国土は俊傑の名声を待ち望み、

越の斧を取り戻すまで、旌旗を打ち立てん。

誰もグウエン・チュン・ハウ氏のペンネームがトゥアン・ドゥックであることを知らずにおり、グウエン・チュン・ハウ氏は初めて入門を許された。」とあり、その後カオ・クイン・クウがA ĀĀに解説を求め、その応答が続いている。ここで重要なことは、開道後カオダイ教の教理について多くの著書を表し、バオ・ファップ（Bảo pháp保法）の地位につき初期カオダイ教タイニン聖座派の教理確立に貢献したグウエン・チュン・ハウ氏（1892-1961）の入門であり、トゥアン・ドゥックが彼の別名であるということである。

- ④ 1925年11月13日（乙丑の年9月27日）のサイバンで「クイ・カオや八娘が詩を降し、A ĀĀが「儒教の書を納める箱を積む珠の車」を解説」と題する詩が記載され、クイ・カオこと詩人フウイン・ティエン・キエウが七言絶句を記し、それに和した七言絶句の詩をトゥアン・ドゥックことグウエン・チュン・ハウが記し、次いでカオ・クイン・クウがクイ・カオの詩に和した七言絶句を記し、その後八娘が七言律詩を記し、その中で使われた「儒教の書を納める箱を積む珠の車」の解説をA ĀĀが行っている。
- ⑤ 1925年12月15日（乙丑の年10月30日）のサイバンで「トゥアン・ドゥックの詩の原文にクイ・カオが和す」と題する記述があり、トゥ

アン・ドゥックが七言律詩の序を降し、次いでクイ・カオが原文に和した七言律詩を記し、その中の第3と第4句にA ĀĀが解説を付している。

- ⑥ 1925年12月6日～12月23日（乙丑の年10月21日～11月2日）のサイバンで「A ĀĀと各神霊の名を借りた至尊の教えを論ず詩文」と題する記述がある。まず1925年12月6日のA ĀĀの七言絶句、翌日その詩に和した七言律詩をボン・ヅインが記して、翌週の14日にヴィン・マイが3つの七言絶句を記し、5日後の19日にミン・グウエト・ティエン・オン（Minh Nguyệt Tiên Ông 明月仙翁）が七言絶句を記し、20日にA ĀĀが七言律詩を、2日後の22日にクウ氏のためにバ・ティエン・ハウ（Bà Thiên Hậu 天后）と七娘が2つ、都合3つの七言絶句が記されている。さらに12月23日に六娘が2つの七言絶句を、続いてバック・ニャン・ダイ・ティエン（Bach Nhãn Đại Tiên 白忍大仙）の七言絶句と八娘の七言律詩とフエ・マン・チュオン・ファン（Huệ Mạng Trường Phan 恵命長潘）というディエン・バ山中の若い住職が二つの七言絶句を記載している。この一連の詩の分析は別稿に譲るが、ディエン・バ山中の若い住職が記した七言絶句の第1句に、「タイニンは霊山の洞で修練する」とあることは、留意すべきことと思う。というのは、ディエン・バに入る門前には瑶池地母像があるためであり、カオダイ教の開設前から嘉定城を護る霊山⁽⁴⁵⁾における霊山聖母信仰との結びつきを示唆していると思われるからである。霊山と言われるバ・デン山にはドン・バ・コ（Đông Ba Cô 三姑洞）の下方に約20㎡位の面積のチュア・ハン（Chùa Hang洞寺）があり、そこには玉皇の像も瑶池金母の像も地藏菩薩や観音菩薩像とともに祀られている⁽⁴⁶⁾からである。
- ⑦ 1925年12月19日（乙丑の年11月4日）のサイバンで「宗金妙武仙翁総統山神の詩」と題する七言律詩の10連環詩が記されている。最

初の七言律詩の8行目の最後の2字が、次の七言律詩の最初の行の最初の2字と繰り返されている。この連環七言律詩は紙幅の関係で略す。

- ⑧ 1925年12月25日(乙丑の年11月10日)のサイバンで「A ĀĀと各神霊の名を借りた至尊の教えを論ず詩文」と題した次のような記述がある。「カオダイは、クウ、タック、サンの3人の弟子の心情を理解している。」と記し、この夜はヨーロッパで上帝が恩情を降し、教えをこの世に論された喜ぶべき日である。」とある。次いでA ĀĀとホン・トォ・ディン・ハウ (Hón Thọ Đình Hầu), 続いてA ĀĀの七言絶句が記載された後に、「師はこの時以前のことを戒め、師と幸せな日を過ごし、そして死に祈願せねばならない。」と記され、それに次いで神仙の中でも大仙とされる李白の七言律詩が記され、その詩に和すドォ・ムク・ティエン (Đồ Mục Tiên 屠目仙)と六娘の七言律詩が続く。この内容もさることながら、最も違和感を禁じ得ないのは、この12月25日のサイ・バンの記述がカオダイ教の聖典である『タン・ゴン・ヒイエブ・チュエン (Thánh ngôn Hiệp tuyển 聖言協選)』巻一の最初の同日の聖言とは記述内容に近似性を見ながら、些かなずれを感じるからである。すなわち『聖言協選』巻一は、「玉皇上帝が、カオダイ仙翁大菩薩マハータットの南方教道を記す」から始まり、最後の七言絶句の中で12人の最初の門弟の名を記載している。この『聖言協選』の文は完全に教えの体制が確立し、その弟子も確定したかのように記されている。しかし上記のサイバンの記載は三氏が師に心酔している様子と三氏が弟子になることを認めていることまでしか読み取れない。「三氏」から「三人の弟子」さらには「三人の子」へと呼称が変わり、「A ĀĀ」が「カオダイ」⁽⁴⁷⁾へと名を変えるのがこの12月25日のサイバンによるのであり、それ以降のカオダイ仙翁大菩薩マハータットや『聖言協選』で言う「カオダイ

仙翁大菩薩マハータット南方」あるいは「玉皇上帝」という呼称はサイバンによるものではなくダイ・ゴック・コ (Đại Ngọc Cơ 大玉機)によるもの、もしくは内教心傳によるものと思われるからである。

まず最終的に明らかにされる玉皇上帝がいかなる神仙であるのかを考察するに、まさに中国神話における各神仙の最高至上の神仙である。まさに道教 (Đạo giáo)における天帝 (Thiên Đế) のことである。

- ⑨ 1925年12月31日(乙丑の年11月16日)のサイバンで「A ĀĀの名を借りた至尊が師の名を称した。それに聖ピエール (St Pierre) の詩」と題する記載がある。12月31日のサイバンであるが、未だに至尊はA ĀĀの名を借りて、その上三氏の理解に疑問を呈した後、「A ĀĀは師である。」と記している。すなわち、1925年末ですら上述した『聖言協選』の内容とはずれが残る。その後はクウや六娘の言が続いている。

この時まで玉皇上帝とA ĀĀが依然として未だに合一したままであることに留意する必要がある。1925年12月19日、12月20日、12月24日の各サイバンの中で、A ĀĀが玉皇上帝に隣り合って出現していた。

このようにして、クウ・タック・サンの壇機は三つの点で転換を果たした。一つは、情愛的な題材から政治的な題材へ転換したこと。二つは、A ĀĀによる情愛的詩の唱和から玉皇上帝による教えへの転換。そして三つは、1925年末から1926年のことになるが西洋神霊学 (Thông linh học phương Tây) のサイ・バンの使用から当時南部で普及しつつあった中国方式の大玉機を使用した交霊方法への転換である。

(5) 望天求道

- ① 1925年12月16日(乙丑の年11月1日)のサイ・バンに、「天を望み教えを求める (望天求道)」と題する記述が降った。

「(1925年12月12日) 乙丑の年10月27日に九天玄女が通告を降した。この一日三位の道友が天を望み教えを求めた」とあり、この文に付けられたフッオン・ヒェウの注に、「望天求道の日は大道三期普度を開設する支度をする日であり、各神霊は三氏を見守って次第に連れて行くことは、三氏が初めて教えに入ったことを意味している。」とある。その上で、「昇仙したフッオン・ヒェウが三氏と一緒に、教えを求めるとはどういうことかを議論し、フッオン・ヒェウへの二、三の問いに答え論じた。三氏の問いに各神霊が答え、私の本分ではありませんので、どうぞA ĀĀにお尋ね下さい。」と記されている。このことは七娘や神霊が、教えについてはA ĀĀが教えの何たるかを答える責任者であると言っているに等しい。次いで、

「1925年12月15日(乙丑の年10月30日) A ĀĀ氏が教えを降した。1925年12月16日(乙丑の年11月1日) 三位は天を望み教えを求めねばならない。純粋に目上の者の恩恵に浴するため九つの香台を供えて屋外に跪き、両手を合わせて拝みなさい。三位の臣下とは、クウ、タック、サンのことである。カオダイ上帝を仰ぎ拝み、三位の邪を改め正に帰するために十分の福吉の施しをなさい。この日の早朝、クウが近所のティ氏の大玉機を借りに行った。

A ĀĀ氏の教えの言葉を思い出し、三氏はサイゴン第1区ブルデェ通り134番地のフッオン・ヒェウ頭師の家の前のグランドで行った。大勢の人が往来し、人や車の行きかう通りに跪き、小さなテーブルを供え、9本の線香を手にして卓上に肘をついて跪いた。三氏はカオダイ上帝をひた向きに仰ぎ拝み、三位の邪を改め正に帰するために十分の福吉の施しをし、ひたすら心を清めてA ĀĀ氏の教えの言葉通りに両手を合わせて黙祷した。[こうしてひたすらに路上に跪き天を望み教えを求めた。カオダイが降り、「儒」の字を記し

たが、三氏は「儒」の字を理解できずに、カオダイが降した詩の解説をA ĀĀ大仙に求めた。]

② 1925年12月16日(乙丑の年11月2日)

『道史日記』の記載の中に「コォ・ブット(機筆)の玄妙さに挑戦してみた状況」と題する記載があり、カン・ヅック(Cần Giuộc)郡フック・ディエン(Phước Điền) 總フック・ハウ(Phước Hậu) 村にあるホイ・フック(Hội Phước Tự) 寺住職イエ・マ・ルアット(Yết Ma Luật) ことグウエン・ヴァン・ルアット(Nguyễn Văn Luật) がサイゴンに来た際にカオ・クイン・クウの家に来て、試しに機筆を行い、カオダイ上帝が七言律詩を降している。この経験がサイバンから機筆への転換のきっかけとなったものと思う。

おわりに

1925年のサイ・バンに関する以上の経緯は、3つに整理することができると思う。一つは九天玄女から瑶池金母に至る中国的神話世界の中で、罪業の救済と衆生の解脱というレトリックの基盤が確立されたこと。二つは間陰道長の示唆とレェ・ヴァン・ズェットの現状認識による民族的意識の堅持と政治的な判断(現状における民衆蜂起の自重)が神意を借りて示されていること。三つはA ĀĀの名を借りてサイ・バンに降臨し三氏に寄り添いながら感化して望天求道にいざない、その上で自らがカオダイであり、玉皇上帝であることを示すこと。この3つにより教理世界・政治状況への判断・教団組織化の基礎の確立という過程がみられる。その中で、きわめて興味深い点は、中国的世界観を背景としていたと思われるものが、カオダイ教成立以前のヴェトナム南部最大の霊山であるタイニン市街地の東北11kmに位置するバ・デン山のチュア・ハン(洞寺)に祀られる玉皇や瑶池金母との関わりを窺わせる点である。加えて言うと天后聖母との関わり⁽⁴⁸⁾も想起される。結果的には、メコンデルタの民間信仰として大き

な信仰を集めていた聖母信仰を、瑤池金母と九天玄女を瑤池宴会礼としてカオダイ教の中に取り入れることで、教団創設後の爆発的な信徒拡大の信仰基盤を確立した一つと言い換えることもできるように思う。

ちなみに言うに崑崙島もヴィン・ロン省東海に名づけられてあり⁽⁴⁹⁾、中国的神話世界がヴェトナム南部に再現されていることを背景としていられる。この点は後教を待つ。

カオダイ教の年間の大礼の日付⁽⁵⁰⁾を見ると、陰暦1月9日は、天の誕生日、即ちカオダイ仙翁大菩薩マハータット、玉皇上帝の誕生日の礼日である。中国の玉皇上帝に誕辰祭があるということがそのままヴェトナムの民間宗教に受け入れられている。このことは、それぞれの神々には産みの親がいるということを知っていることであり、神々の世界にも男女による役割分担がなされているという宗教観を前提とせざるを得ない。この宗教観によれば、玉皇上帝を筆頭とする神々の世界の中に、中国古代神話の『山海経』などによれば崑崙山に住む西王母を筆頭とした仙女の世界が対極にある。この西王母が崑崙山の瑤池の畔にある瑤池宮に住んでいたもので西王母の異称として瑤池金母という呼称が成立したものである。この瑤池金母という呼称が一般化したのは明代の『封神演義』からであり、中国人がヴェトナム南部に最初に入植した1679年以降に同地にもたらされた民間信仰上の世界観に他ならないと思う。この世界観は、ヴェトナム南部のチャムやクメールの人たちの聖母信仰と習合してカオダイ教創設期以前の宗教環境が形成されていったものと思う。その中で、外教公傳の特徴は、植民地支配下の未だ民族解放闘争組織が創設されていない中で、ヴェトナムの人々の民族的な自由と平等な社会、大同世界の創出を信仰の自由を逆手にとって確立しようとし、その一方で解脱による民衆の救済を目的とした⁽⁵¹⁾ものという点で特徴を持つと考えられる。

<注>

- (1) カオダイ教の教団としての成立時期については、最初に信徒たちが丙寅の年8月23日(1926年9月29日)に教えを闡く申告書(Tờ Khai Tịch Đạo)を提出した時期か、丙寅の年9月1日(1926年10月7日)南圻総督ル・フォル(Le Fol)よりカオダイ教が正式に教団を開くことを認められた時期。そして南圻総督の認可から2ヶ月もしない丙寅の年10月15日(1926年11月19日)に政権と公衆を前に大道開明大礼を組織した時期の3期の説がある。最初と最後はカオダイ教の支派を専らとする。
- (2) 高津 茂(1985)「護法ファム・コン・タック小史試訳—カオダイ教聖典の考察(1)—」, 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』第20号, 1986年3月, pp.88-108
高津 茂(2010)「近世ヴェトナムの「万教合一論」—カオダイ教聖典『聖言(Thánh Ngôn)』についての基礎的研究(1)—」, 日本共生学会『共生科学』第1号, 2010年3月, pp.103-111
高津 茂(2012)「ヴェトナム南部メコン・デルタにおける五支明道(Ngũ Chi Minh Đạo)とカオダイ教」, 星槎大学紀要『共生科学研究』第8号, 2012年3月, pp.26-44
高津 茂(2015)「カオダイ教におけるフォ・ロアンとサイ・バン —カオダイ教形成過程におけるサイ・バンを中心として—」, (京都大学人文科学研究所)『人文学報』第108号, pp.127-141
高津 茂(2018)「ゴォ・ヴァン・チュウ(Ngô Văn Chiêu)とカオダイ教内教心傳(Nội Giáo Tâm Truyền)」, 東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第52号, 2018年2月, pp.101-122
- (3) •Victor L.Oliver ; " CAODAI SPIRITISM A Study Of Religion In Vietnamese Society", ' Studies In The History Of Religions (Supplements To Numen)'. XXXIV, Leiden, E.J.Brill,1976
•Jayne Susan Werner ; 'Peasant Politics and Religious Sectarianism : Peasant and Priest in

- the Cao Dai in Vietnam', Monograph Series No.23/ Yale University Southeast Asia Studies, New Haven, 1981
- Sergei Blagov : 'CAODAISM Vietnamese Traditionalism and its Leap into Modernity', Nova Science Publishers, Inc., New York, 2001
 - Đồng Tân : Lịch Sử Cao Đài Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Quyển I, Phần Vô Vi (1920-1932), Cao Hiền Xuất Bản, Saigon, 1967
 - Đồng Tân : Lịch Sử Cao Đài Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Quyển II, Phần Phổ Độ (1926-1937), Cao Hiền Xuất Bản, Saigon, 1972
 - Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo : Lịch Sử Đạo Cao Đài, Quyển I, KHAI ĐẠO. Từ Khởi Nguyên Đến Khai Minh, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2005, 【以下「KHAI ĐẠO」と略す。】
 - Trung Tâm Khoa Học Xã Hội và Nhân Văn Quốc Gia, Viện Nghiên Cứu Tôn Giáo : Bước Đầu Tìm Hiểu Đạo Cao Đài, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, Hà Nội, 1995 【以下「Bước Đầu Tìm Hiểu Đạo Cao Đài」と略す。】
 - Lê Anh Dũng : Lịch Sử Đạo Cao Đài Thời Kỳ Tiềm Ẩn 1920-1926, Nhà Thuận Hoá, Huế, 1996
- (4) 高津 茂 (2018), 参照
 - (5) 高津 茂 (2015), 参照
 - (6) 三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史 心霊研究から超心理学へ』講談社, 2008 pp.186-188によれば, アラン・カルデックの本名はイポリット・レオン・デニザール・リヴェイユ (1804~) で, 主著は『霊の書 (Le Livre des Esprits)』(1856) である。
 - (7) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Cơ Quan Phổ Thông Giáo Lý Đại Đạo : 'CAO ĐÀI VẤN ĐÁP', Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2010 【以下, CAO ĐÀI VẤN ĐÁPと略記する。】p.25によれば, 「三期普度 (Tam Kỳ Phổ Độ)」とは, この時代に応じた第3期のあらゆる衆生を救済することである。「三教帰源 (Tam giáo qui nguyên)・万教一理 (Vạn giáo nhưt lý)」の精神の上に第3の救済の時代の中で打ち立てられた上帝の教えのこと。第3期は最後の期であり宇宙の一つの大循環が終了し大恩赦を得て覚悟した人や衆生を救済し尽くし, 「世の決まりごとが大同であり, 天の教えは解脱である (Thế đạo đại đồng, thiên đạo giải thoát)」とこのことを目的とする。
 - (7) CAO ĐÀI VẤN ĐÁP, pp.66-67 によれば, 「カオダイ教の目的は, 平等な社会と大同世界の建設と人々を完全にすることにある。心靈面については, カオダイ教は生死の輪廻から解脱する目的を持っている。
 - (8) 高津 茂 (2006) 「カオダイ教の日本への夢想 1934-1941」, 東洋大学アジア文化研究所『研究年報』第41号, 2007年2月, pp.16-34
高津 茂 (2013) 「両大戦間期におけるカオダイ教と日本との関わり (上) — 『復国時期1941-1946におけるカオダイ教の歴史』を中心として —」, 学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』第15号, pp.419-460
高津 茂 (2014) 「両大戦間期におけるカオダイ教と日本との関わり (下) — 『復国時期1941-1946におけるカオダイ教の歴史』を中心として —」, 学習院大学東洋文化研究所『東洋文化研究』第16号, pp.432-466
 - (9) カオダイ教の経典の一つに『天道と世道経』(Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh ; 'KINH THIÊN ĐẠO và THẾ ĐẠO', Tái bản năm Kỷ Sửu - 2009, Tây Ninh) がある。ちなみに, 天道の経典の中には, 「玉皇上帝」, 「仏母真経」「弥勒真経」等が含まれている。
 - (10) 高津 茂 (2011) 「二つの抗戦期に見るカオダイ教タイ・ニン聖座派と愛国諸派の民族的共生への動きの対比」, 日本共生科学会『共生科学』第2巻, pp.109-122
 - (11) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ (Toà Thánh Tây Ninh) ; 'ĐẠO SỬ', Quyển I : Đạo Sử Xây Bàn, Năm Ất Sửu (1925), Quyển II. Từ năm Ất Sửu (1925) đến năm Kỷ Ty (1929), Biên Soạn : Nữ Đầu Sư Hương Hiếu, Hội Thánh Giữ Bàn Quyền,

- Do Thánh Thất Tộc Đạo Westminster, Tiểu Bang California, Hoa Kỳ, ấn hành năm Ất Hợi (1995), In tại MEKÔNG PRINTING, 2421 W. First Street, Santa Ana CA 92703 USA 【以下, Hương Hiếu (1995) と略記する。】
- (12) KHAI ĐẠO pp.416-419
- (13) Hương Hiếu (1995) Quyển I, pp.13-16. Lời Xác Nhận, (Đạo Sử Xây Bàn Lời Xác Nhận), pp.17-18. (01. Sơ Giải Sự Tích Xây Bàn), pp.19-24. (02. Tiểu sử xây bàn) pp.25-64
- (14) Hiền-Tài Nguyễn Văn Hồng : ‘ĐẠO SỬ NHỨT KỶ’, Quyển I - Phần I, Thời kỳ Khai Đạo và Đức Quyền Giáo Tông cầm quyền nền Đạo, Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ Toà Thánh Tây Ninh, Tài Liệu Suu Tầm 2017 【以下, Nguyễn Văn Hồng (2017) と略記する。】
- (15) 3氏の履歴や業績については, 以下を中心に参照した。KHAI ĐẠO pp.357-369
Phạm Bích Hợp : Người Nam Bộ và Tôn Giáo Bản Địa, Nhà xuất bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2007. 【以下, 「Phạm Bích Hợp」と略す】 pp.211-215
- (16) Cao Bạch Liên, Huệ Khai : ‘HÀNH TRẠNG TIỀN BỒI CAO TRIỀU PHÁT 1889-1956’, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, Hà Nội, 2010, 【以下, 「TIỀN BỒI CAO TRIỀU PHÁT」と略す。】 p.12 カオ・チュウ・ファットの父方の祖父カオ・カン・ティエット (Cao Cản Thiệt 1825-1884) は潮州人であり, およそ20歳で中国の広東省からバック・リュウ (Bạc Liêu) に来て開墾し大きな事業を打ち立てた。カオ家の祖廟と族譜がある。
- (17) Hương Hiếu (1995), Quyển I, p.87 (36. Khổ tâm Hành Đạo của Đức Cao Thượng Phẩm
- (18) Phạm Bích Hợp, p.211
- (19) 高津 茂 (1985) 「護法ファム・コン・タック 小史試訳 -カオダイ教聖典の考察 (1)-」, 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』第20号, 1986年3月
- (20) 渡邊欣雄『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房1991, 53-130頁
玉皇上帝の誕辰祭が1月9日であることから,
- 中国の民間信仰における玉皇上帝のパターンとの比較が可能である。1月9日の至尊の大礼(Đại Lễ Vía Đức Chí Tôn)については, Bước Đầu Tìm Hiểu Đạo Cao Đài, p.242. Bảng lịch lễ hàng năm của đạo Cao Đài 参照
- (21) ‘KHAI ĐẠO’ p.366
- (22) CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN Soạn giả : Hiền Tài bút hiệu ĐỨC NGUYỄN Ấn hành do theo hiệu đính 03-2003【以下, ‘CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN-2003’ と略す。】によれば, コオ・クワン・ファット・タン・フオ・トン・ザオ・リ (教理普通送信機関) [発聲普通教理 (機関)]; カオダイ教教理を電波放送に乗せて布教する機関。
- (23) CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN-2003によれば, Ban Thế Đạo 班世道 とは, 「時勢を憂い世を憐みながらも, 十分に道心を持っており, 仁愛の精神に富んでいる多くの人が, この善良な願いを実行するための機会をつくる任務を持つ。」
- (24) CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN-2003によれば, Douon-Nhon (Đường Nhơn 唐人) とは中国人のこと。
- (25) CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN-2003によれば, Tan-Nhon (Tân Nhơn 秦人) とは簡潔に言えばカンボジア人のこと。グウエット・タム (Nguyệt Tâm 月心) 真人の掌管権の下にカオダイ教の外教聖会がプノンベンに置かれたこともあったが解体され, その後護法がカンボジアに宗道を立て, プノンベン宗道と言われた。タイニン聖座の域内にカンボジア人宗道は連絡事務所を設立しており, 門前には次のような対聯が掲げられている。
宗道同門, 昔日開林成聖域
秦人合種, 今朝向善享天恩
- (26) CAO ĐÀI TỪ ĐIỂN-2003によれば, Daus-Dous (Đầu Sư Đường 頭師堂) とは, Daus (Đầu Sư) の方が仕事をする事務所のことである。「ダウ・ス (頭師) の権能」については, 高津 茂 (1986) 『「法正伝注解」 訳考〔1〕 -カオダイ教聖典の考察-』, 東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』第21号, 1987年3月, pp.21-23を参照

- (27) カオダイ教の職位については、高津 茂 (1988) 『『法正伝注解』 訳考〔2〕—カオダイ教聖典の考察—』、東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』第23号、1989年3月、p.74の表を参照
- (28) CAO ĐÀI TỬ ĐIỀN-2003によれば、上品とは協天台の高級職位であり、タップ・ニ・トイ・クワン (Thập nhị Thời Quân 十二時君) の上に立ち、護法の権能の下で仕事をする。
- (29) 高津 茂 (1999) 「1946~1948年時のカオダイ教(1) 一国教への夢」、『立教大学史学会『史苑』第60巻第1号(通巻163号) 1999年10月、pp.61-83
- (30) 三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史 心霊研究から超心理学へ』講談社、2008 p.193
- (31) Hương Hiếu (1995), pp.19-24
- (32) 高津 茂 (2015)
- (33) Nguyễn Văn Hồng (2017), pp.154-155
- (34) ‘TỬ NGŨ ĐIỀN CÓ CAO ĐÀI, THIÊN VÂN’, Hiền Tài Quách Văn Hoàによれば、「九天玄女とは、中国の尚古時代の仙女。また、‘CAO ĐÀI TỬ ĐIỀN-2003’によれば、「六娘」とは、瑤池宮の九位仙女の第6番目の仙女。六娘は、女性聖人であるジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc) のこと。さらに「七娘」とは、同様に第7番目の仙女。カオダイ教の機筆の歴史の中では、七娘はドアン・ゴック・クエのこと。さらに、「八娘」とは、同様に第8番目の仙女。ファット・マウ (Phật Mẫu 仏母) の側に仕えている。八娘は青い衣服を着て、タイニン聖座の報恩寺の仏母を祀る像の傍で、手に仏寺の花籠である法宝を持ち仏母の右側に座っている。八娘は、中国の前漢の時代にバック・リエン (Bách Liên 白蓮) あるいはリエン・バック (Liên Bạch 蓮白) [白い蓮の花] の名で世に降る。
- (35) Nguyễn Văn Hồng (2017), p.81
- (36) 瑤池金母という名称は、宋代以降の道教において最高神とされる玉皇大帝の妻とされ「正宮娘娘」と呼ばれる西王母の異称の一つ。瑤池とは崑崙山にある美しい湿地で、瑤池金母が住まう霊域とされる。瑤池金母に「金」の字が含まれるのは、五行のうちの一つである「金」が西方に対応するためと考えられる。
- (37) 『塘城集仙録』六巻 瑤池金母普度收圓定慧解脱真經 参照
- (38) CAO ĐÀI TỬ ĐIỀN-2003によれば、「ボン・ズイン (Bồng Dinh 蓬瀛) とは仙界を指し、伝説によれば、ポット・ハイ (Bột Hải 渤海) 上にある3つの小島である。この島の一つの蓬萊島には蓬萊山があり、そこには8つの大変美しい石の洞があり、八仙 (Bát Tiên) の住処となっている。」
- (39) レ・ヴァン・ズェットは阮朝を開いた功臣の一人。阮朝下南部メコンデルタ地帯を統括する嘉定城総鎮に任命され、1813年のカンボジア王弟のクーデターに当たり、カンボジア王を助けて侵攻タイ軍を駆逐させヴェトナムの宗主権を確立した軍人。
- (40) TIỀN BÓI CAO TRIỀU PHÁT, p.16
1925年6月26日 ファン・チュウ・チン (Phan Châu Trinh) がパリからサイゴンに戻ってきた。カオ・チュウ・ファットは、いつも当時のプラン (Pelerin) 通り54番地のフェ・ラウおばさん (Bà Huệ Lâu) の旅館でチンと接触していた。1925年11月 カオ・チュウ・ファットはファン・チュウ・チンの19日の「東西の道徳と論理 (Đạo Đức và Luân Lý Đông Tây)」と27日の「官治主義と民治主義 (Quản Trị Chủ Nghĩa và Dân Trị Chủ Nghĩa)」の2回の演説に出席した。1925-1926年の間にカオ・チュウ・ファットはハン・ユア店舗における求仙の機に参加した。
- (41) CAO ĐÀI VÂN ĐÁP, pp.86-88, 諸先輩が瑤池の母や九娘と共に宴に同じように出席できることには、ティエン・ニョン・ドン・ニュット (Thiên nhơn đồng nhứt 天人同一) やティエン・ニョン・ヒェップ・ニュット (Thiên nhơn hiệp nhứt 天人協一) という意義がある。一つということは三期普度の中では「無為と形あるものが同じ使命を持っている。」という事を意味している。
- (42) 1926年に上品に封ぜられたカオ・クウイン・クウは1929年に他界している。よって、1949年

時点でこの世の人という意味では「有形の人」ではない。

- (43) 1925年10月20日時点で3氏は護法でも上品でも上生でもない。後代に書き直されたことを意味している。
- (44) KHAI ĐẠO, pp.373-377
- (45) 『大南一統志』「嘉定省」山川誌「靈山」の項参照。地理風水からハノイ(昇龍城)は傘圓山(Tản Viên Sơn)が、フエは御平山(núi Ngự Bình)が、サイゴン(嘉定城)は靈山(Núi Bà Đen)が護る位置にあると思われる。
- (46) Huỳnh Minh ; ‘TÂY NINH Xưa và Nay’, Loại Sách Sưu Khảo Do Tác Giả Xuất Bản,1972, pp.40-43「聖母の靈山事績(Sư Tích Linh Sơn Thánh Mẫu)」を参照。
Ngô Đức Thịnh ; ‘Đạo Mẫu Việt Nam’, Tập.1, Nhà Xuất Bản Tôn Giáo, 2009, 【以下, 「Đạo Mẫu Việt Nam」と略す。】 p.299 「タイニン, 特にバ・デン山はヴェトナム南部における聖母信仰の中心である。
- (47) CAO ĐÀI VẤN ĐÁP, p. 26-28
- (48) Đạo Mẫu Việt Nam. p.308-321
- (49) 『大南一統志』「永隆省」山川誌「崑崙島」の項参照。
- (50) CAO ĐÀI VẤN ĐÁP, pp.84-85
- (51) CAO ĐÀI VẤN ĐÁP, p.66-67「大同世界と平等社会の建設と人間の完全化」参照

(客員研究員)

About the Xay Ban group and the Caodai Exoterism at 1925

TAKATSU Shigeru

In this paper I follow the process which the Caodai Exoterism at 1925. Through the 19 records of this annual Xay Ban Seance is in the "Documents of the Caodai history(Dao Su) Nu Dau Su Huong Hieu edited in the 1st volume"., I clarify the characteristic of the table-turning(Xay Ban) Seance in this year. These Xay Ban Seance was mainly performed with 3 people, Cao Quynh Cu, Pham Cong Tac and Cao Hoai San from this middle a year, and many divine spirits fell and informed about a message. According to the analyze of this divine spirits, I can point out 4 kinds of message . 1 is a name called AAA and CaoDai descends to earth and guides 3 people. For the living thing's relief of a soul and deliverance, 2 choose as Dieu Tri Kim Mau, and Yen Hoi DieuTri Cung is established. 3 people wish for all of heaven earnestly, and the teaching, it's purchased, I came. 4 were about recognition of the situation of politics of the those days.

For the outlook on this religion, I 'd like to point out that I understand the influence of the sacred Mt. Ba Den and the Holy Mother faith in South Vietnam, I clarify the characteristic that the creed of the religious community was established in a background in the Chinese literary expression pre-modern times

Key words: Caodaism, Caodai Exoterism, Ceremony of the Dieu Tri Banquet , Expecting the God and demand the Cao Dai Teaching, Table-turning Group